

タイ語を母語とする日本語学習者の不同意表明 における語用論的特徴

ピナンソツティクン ポラニー

要 旨

本研究では、日本語母語話者とタイ語母語話者の比較を通して、タイ語を母語とする日本語学習者による不同意表明における語用論的特徴を明らかにした。談話完成テストを用い、決定木分析手法によって不同意表明の切り出しと終結部に現われた意味公式の出現傾向及びそれに対する文脈的な要因（相手との上下関係、親疎関係、負担度の度合いの大きさ）との関係を分析した。その結果、不同意表明の切り出しに見られた「相手の発話の受け入れ」の出現率が非常に高いという点などで学習者は日本語母語話者及びタイ語母語話者と異なることが分かった。不同意表明を終結する際に、日本語母語話者は「代替案」で終結する傾向があった。学習者は両言語母語話者の中間位置で「代替案」を使用する傾向があった。学習者の切り出しに「相手の発話の受け入れ」の選択には負担度の大きさの違いとの関係が見られなかったという点などでタイ語母語話者と共通して日本語母語話者と異なることが分かった。全体的にはタイ語を母語とする日本語学習者は日本語母語話者とタイ語母語話者の中間的な傾向にあり、目標言語である日本語の表現に近づきつつあることが示唆された。

【キーワード】不同意表明、タイ語を母語とする日本語学習者、語用論的特徴、意味公式、有意な差

1. はじめに

2012年の国際交流基金の「海外日本語教育機関調査」によると、日本語学習者人口でタイは第7位であった。タイ語を母語とする学習者の数は2009年では78,802人であったが、2012年では64.5%増加し、129,616人になったと報告されている。タイにおいて日本語学習者の数が増えつつある。にもかかわらず、タイ語を母語とする日本語学習者による言語行動を扱った研究はまだ多く行われていない。その中で「断り」といった発話行為¹に焦点を当て学習者の言語使用の実態、母語からの影響を明らかにしたものがあるが（ルンティーラ, 2004; 浜田・成田, 2007）話し手と話し相手の間で意見が一致しない「不同意表明」は管見ではまだ研究対象とされてない。

本研究はタイ語を母語とする日本語学習者の不同意表明を日本語母語話者とタイ語母語話者による不同意表明と比較することによって、この前者の語用論的特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 研究の対象

本研究は「不同意表明 (disagreement)」を、

Sifianou (2012) に従い、「話し相手が示した見解に対するそれと異なるものの表明」と定義する。木山 (2005) では「不同意」を不同意の内容によって「事実である不同意」と「意見である不同意」に分類し、また、不同意の性質という観点から「実質的な不同意」と「儀礼的な不同意」に分類している。本研究は議論の余地がない「事実である不同意」は「訂正 (correction)」²という発話行為と見なし、ほめなどに対する「儀礼的な不同意」は「ほめに対する否定的な返答 (negative compliment responses)」と見なし、意見が一致していない場合だけを「不同意表明」として扱う。

2.2 学習者の不同意表明

中間言語語用論研究において学習者の不同意表明を取り上げた代表的な研究に Beebe & Takahashi (1989a, 1989b) がある。この研究は目上に対する状況と目下に対する状況に着目してアメリカ英語母語話者と日本人英語学習者の不同意表明の表現を意味公式³ (semantic formulas) に分類し、アメリカ英語母語話者は必ずしも日本人英語学習者より直接的、明示的ではないこと、日本人英語学習者は不同意を避けるとは限らないことなどを明らかにした。

末田 (2000) は日本語母語話者同士の会話と日

本語母語話者と韓国語母語話者間の日本語会話における不同意表明の種類、不同意表明のストラテジー、調整ストラテジーを検討した。その結果、認識に対する不同意表明には日本語母語話者は比較的間接的なストラテジーを多く使用する傾向がある、との結果を得ている。

これらの研究は日本語母語話者および日本語学習者の不同意表明の特徴を明らかにした。しかし、学習者の母語との比較が行われなかったため、母語がどのように学習者の不同意表明の言語使用に関わっているかについてはまだ解明されていない。

2.3 タイ語を母語とする日本語学習者の言語行動

タイ語を母語とする日本語学習者の発話行為を扱った研究としてはルンティエラ (2004)、浜田・成田 (2007) が挙げられる。ルンティエラ (2004) は「提案⁴に対する断り」を対象とし、浜田・成田 (2007) は「申し出に対する断り」に焦点を当てた。ルンティエラ (2004) は断り表現に現れた「付加詞」「理由」「決意表明」の3つの意味公式の出現パターンを分析した。親疎関係、上下関係、家族関係の違いを中心に検討した結果、タイ語母語話者は親疎関係によって2つのパターンを使い分けており、日本語母語話者は上下関係と家族関係を重視して4つのパターンを使い分けしているとしている。また、学習者は母語の影響を受け、母語のパターンの割合に近接していると報告している。浜田・成田 (2007) はタイ語を母語とする日本語学習者による不自然な「大丈夫」を分析し、タイ語の「マイペンライ」表現からの語用論的転移を指摘した。

不同意表明は相手の発言に対する否定的反応という点で断りと共通している。以上の先行研究の結果を踏まえるならば、学習者の不同意表明における語用論的特徴として、断りと同様に、言語形式には母語からの強い影響が見られ、表現の使い分けに上下関係より親疎関係を重視することが予測される。

2.4 研究課題

本稿では語用論的特徴を社会的文化的コンテクストに応じた言語使用の特徴を意味するものとし、不同意表明における語用論的特徴を不同意表明に現れた言語形式とそれに関わる状況的な要因との関係から捉える。その特徴を解明するために、不同意表明の中で、特に切り出しと終結部に焦点を当て、日タイ語にどのように類似点・相違点が見られるのか、また、学習者の日本語にはどのような状況において

母語の影響や他の特徴が見られるのかを検討する。

先行研究では切り出しは相手との対人関係を維持するために重要であり、適切に表現しなければならないと指摘されている (謝, 2001; 田島・石崎, 2012 など)。依頼する場合はいきなり本題に入ると相手に良くない印象を与えることになると考えられる。ところが、相手と見解が一致していない場合には、相手に配慮する表現ばかり使うと、自分の意見が思い通りに伝わらない可能性も考えられる。また、終結部については、会話をスムーズに続けるためには話の最後をどう結ぶかが重要であり、話し手がそれについて苦慮することがよくあるという指摘がある (伊藤 2004)。こうしたことを踏まえて、実際には切り出しと終結部にどのような傾向が見られるかを調べる。

3. 研究方法

3.1 調査方法

3.1.1 調査対象者

本研究では、日本語母語話者 (以下、JJ) 40 名、タイ語を母語とする日本語学習者 (以下、JFL) 40 名、タイ語母語話者 (以下、TT) 40 名の合計 120 名を調査対象とした。各グループの性別⁵と年齢の詳細を表 1 に示す。

表 1. 調査対象者の詳細

調査対象者	人数	年齢(平均)
JJ 日本語母語話者	40 名 男: 20 女: 20	18 ~ 26 (20.88)
JFL 日本語学習者	40 名 男: 4 女: 36	19 ~ 23 (20.7)
TT タイ語母語話者	40 名 男: 16 女: 24	18 ~ 26 (19.85)

JJ は名古屋市内にある 4 年制大学の大学生と大学院生で、TT はタイバンコク市内にある 4 年制大学の大学生と大学院生である。JFL⁶はタイバンコク市内にある 4 年制大学の学部在籍しており、全員日本での留学経験を持っていない日本語能力中級レベルに相当する者である。JJ と TT はお互いの言語についての学習経験を持っていない者に限定する。

3.1.2 データの収集法

本研究は様々な場面設定が可能で発話行為の典型例を観察することができるという利点を持つ談話完成テスト (Discourse Completion Test, DCT) を採用した。場面設定は上下関係・親疎関係・負担度の

大きさという 3 つの指標に基づくものとした。Beebe & Takahashi (1989a, 1989b) とルンティエラ (2004) では負担度の大きさが検討されなかったが、この 3 つの状況的な変数はいずれも異文化間比較の際に重要な要因であるとされているため (Brown & Levinson, 1987 など) 本研究は 3 つとも考慮することにした。

Angouri & Locher (2012) によると言語行動には、決断を下す場面やディベートの場面におけるような不同意表明を求める活動もあれば、結婚式などにおけるような不同意表明が予期されない活動もある。本研究の DCT の内容は調査対象者にとって身近な話題で相手となんらかの事柄について一緒に考えて決断を下すようなものに統一した。具体的な場面構成は表 2 の通りである。

表 2. DCT 場面構成

	上下関係	親疎関係	負担度の大きさ	意見を述べる状況
1	同等	親	小	旅行先についての話
2	同等	親	大	
3	同等	疎	小	歓迎会の料理についての相談
4	同等	疎	大	
5	目上	親	小	講座をアピールする活動についての打ち合わせ
6	目上	親	大	
7	目上	疎	小	発表会を行う場所についての打ち合わせ
8	目上	疎	大	

話し相手との上下関係は社会的に同等な関係である場合 (同等) と相手が目上である場合 (目上) の 2 つを設定し、親疎関係は親しい関係 (親) と疎遠な関係 (疎) の 2 つを設定した。不同意の負担度の大きさ⁷⁾は Rees-Miller (2000) の不同意表明の深刻さ (severity) を参考にし、意見が合わない度合いによって不同意表明の負担度が大きい場合 (大) と小さい場合 (小) に分けた。相手の意見に対してあまり賛成していない気持ちを持つ場合を負担度が小さいものとし、どうしても賛成できない気持ちを持つ場合を負担度が大きいものとする。DCT には賛成していない度合いとその背景にある理由を提示する (稿末資料を参照)。

各場面を作成した際、タイ語版と日本語版の DCT の間に内容の差異がないかどうかをもう一人の日本語が話せるタイ人の協力者に確認してもらった。さらに、タイ語を母語とする日本語学習者が相手に不同意を表明する際にどのようなことに配慮して言語表現を選択しているのかを探るため、DCT の後で学習者にフォローアップ・インタビューを行った。

3.2 分析方法

分析方法に関しては意味公式を使用し、不同意表明の切り出しと終結部の位置に現れるものに焦点を当てて分析を行った。Beebe & Takahashi (1989a, 1989b) では、不同意表明に現われた意味公式を「批評 (criticism)」、「提案 (suggestion)」、「肯定的な発言 (positive remark)」、「感謝 (gratitude)」、「共感 (empathy)」、「賛成のしるし “Yes” (Token agreement “Yes”）」に分類した。日本語の場合には、賛成のしるしとしての「はい」が英語の「Yes」ほどは用いられず、また「批評」は理由 (本研究では「否定理由」と呼ぶ) と直接的な批判 (本研究では「不同意の結論」と呼ぶ) にさらに再分類できると考えられる。本研究は先行研究のままの分類を使用することには問題点があると考え、分類をさらに細かくした「断り」の Beebe et al. (1990) を参考することにし、実際のデータに基づいて修正・補足を行った。具体的な分類は表 3 で示す。

意味公式の分類は筆者と日本語母語話者とタイ語母語話者の協力者で独立に行い、その結果、コーディングの一致度は JJ : 90%、JFL : 86%、TT : 92%であった。一致しなかった場合、協力者と相談してお互いが納得した基準を採用した。切り出しは不同意表明において話し手が最初に用いる意味公式とし、終結部は話し手が最後に用いる意味公式とする⁸⁾。例 1~3 は実際の切り出しと終結部の意味公式の分析例である。

1) 201 は見つけにくいので 他の部屋にした

切り出し

「否定理由」

方がよいのではないですか。

終結部

「代替案」

(JJ 場面 7 : 目上・疎・小)

表 3. 不同意表明における意味公式の分類

意味公式	意味機能	例
相手の発話の受け入れ	相手が述べた意見に対する積極的な反応の表明	いいですね。そうですね。行きたいけど
聞き返し	質問文で相手の発話内容を確認	手巻き寿司ですか？
ためらい	答えを遅らせるポーズの表明、決断できないことの表明。	あのう、ああ、うーん、どうしようかな
情報要求	相手に情報を要求	どうやって行くの
謝罪/感謝	相手の意に添えないと感じた場合のわびやお礼	すみません、申し訳ありません
呼びかけ	相手に対する呼びかけ	先生、Aさん
感動詞的表出	驚きなどの心情を伝えるための表出	へえ!?
情報提供	賛成しない表明を提示せずに情報を提供	他のもあります
否定理由	賛成しない理由の説明	暗いので、遠いから
不同意の結論	明確な相手の意見に賛成しない旨の表明	無理、良くないと思います
代替案	新しい案を提示	～方がいい、～はどうですか
願望	自分の意向を提示	私は～したい
条件付き妥協	条件によって相手の意見に付き従う可能性を提示	ならば～いいけど
意見要求	相手に意見を要求	どう思いますか
代替案の理由	代替案の良さを説明	もっと広いし

2) そうですね。 やってみてもいいかもしれ
切り出し 中間部
「相手の発話の受け入れ」「相手の発話の受け入れ」
ませんが、他の専攻の例を見ると、デモン
ストレーションを行っても、あまり効果がない
かもしれません。

終結部

「否定理由」(JJ 場面5:目上・親・小)

3) เปลี่ยนสถานที่ดีไหมคะ ห้อง201แคบและมืด
場所を変えたらいかがですか 201 号室は狭くて
切り出し 暗いので
「代替案」 中間部「否定理由」
หนูว่าไม่ค่อยเหมาะกับการสัมมนา
セミナーにはあまり向いていないと思います。

終結部

「不同意の結論」(TT 場面8:目上・疎・大)

不同意表明は相手の発言に対して否定的な見解を述べるものため、基本的に不同意表明の主要な部分は「否定理由」と「不同意の結論」になると思われる。しかし、スムーズにコミュニケーションを取るためには、そのような否定的な見解を述べるだけでなく、状況によって不同意を和らげたりほめかしたりするような表現をも使用することが多い。また、一緒に考えて結論を目指す場合には、結論に結びつくような新しい提案を取り上げることがよくあると思われる。

本研究は以上の考えに基づき、15 種類の意味公

式をさらに (A) 不同意への付加詞、(B) 不同意の主要部、(C) 代替の見解の 3 つのグループにまとめた。(A) 不同意への付加詞は意味公式 ~、(B) 不同意の主要部は意味公式 ~、(C) 代替の見解は意味公式 ~ に相当する。

本研究では JJ・JFL・TT による上記の意味公式グループの出現傾向を比較し、各意味公式の出現頻度を調べる。調査対象者のグループ間の違いや、文脈上の要因(親疎関係・上下関係・負担度の大きさ)がどのように切り出しと終結部の意味公式の選択に影響するかについての違いを明らかにするために、決定木分析を用いた。

本来、量的分析において切り出しと終結部に現れた意味公式の出現率が統計的に有意であるかどうか、またその出現率はどの要因からの影響を受けているかを調べる際に、カイ二乗検定が有効である。ところが、カイ二乗検定だけでは有意な結果が得られたとしても、複数の要因がある場合は、その要因群間の中でどの要因が意味公式の出現に最も影響を及ぼすかを特定することが難しい。決定木分析という手法には「CHAID (Chi-squared Automatic Interaction Detection)」というアルゴリズムがあり、このアルゴリズムではカイ二乗値を評価基準とし、各要因が持つ複数の種類のうちに傾向が同じものをグループ化し、要因群間の中で最も影響を及ぼしている要因と要因群間の相互作用を追求することができる。このように、決定木分析は意味公式の出現と非出現の比率を分析するのに適しており、文脈上の

要因の中でどれが意味公式の出現により多くの影響を与えるかを特定することができると考えられる。

4. 結果

4.1 不同意表明の切り出し

4.1.1 全体的な傾向

切り出しにおいて、(A) 不同意への付加詞、(B) 不同意の主要部、(C) 代替の見解の3つの意味公式グループの出現頻度を観察すると、図1のように、JJ に最も多く現れたのは(B) 不同意の主要部であることが分かった。TT は JJ と同じ傾向が見られたが、JFL は異なり、(A) 不同意への付加詞が最も多く見られた。図1の割合は JJ・JFL・TT の各意味公式グループを全体の意味公式グループの出現回数(320回:8場面×40名)で割ったものを指している。

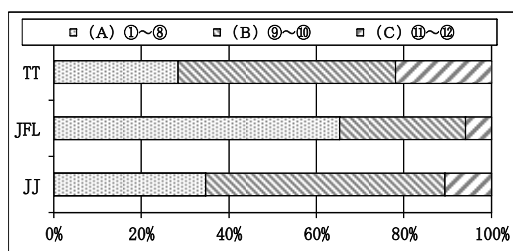


図1. 切り出しの全体的な出現傾向

各意味公式の出現頻度を観察していくと、JJ には「相手の発話の受け入れ」「聞き返し」「ためらい」「情報要求」「謝罪/感謝」「否定理由」「不同意の結論」「代替案」「願望」の9種類の意味公式が現れた。それに対して、JFL には JJ に見られなかった「呼びかけ」が現れた。TT にはさらに「感動詞的表出」「情報提供」の2種類の意味公式が見られた。

図2では JJ・JFL・TT に現れた各意味公式の出現率を示し、どの意味公式が多く現れたかを比較した。図2にある ~ の数字は、上記の意味公式の12種類を指している。

(A) 不同意への付加詞の意味公式グループ(意味公式 ~)の中で最も多く現れたのは「相手の発話の受け入れ」であった。これは JJ・JFL・TT に共通している。しかし、JFL における出現率は JJ

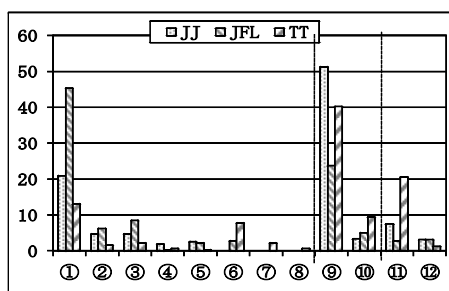


図2. 切り出しの各意味公式の出現率

と TT の2倍以上高かった。(B) 不同意の主要部の意味公式グループ(意味公式 ~)においては、「不同意の結論」に比べて「否定理由」の方が JJ・JFL・TT のどのグループにも出現率が高かった。(C) 代替の見解の意味公式グループ(意味公式 ~)では、JJ と TT において「代替案」の出現率が「願望」より高かった。

次に、切り出しにおいてそれぞれの12種類の意味公式の出現傾向に違いがあるかどうかを決定木分析によって調べた。12種類の意味公式と3つの対象者グループという2つの名義尺度を独立変数とし、意味公式の出現と非出現という2種類のデータからなる名義尺度の頻度を従属変数とした。その結果、意味公式の種類の違いに有意な差があった [$\chi^2(7) = 1949.536, p < .001$]。観察の結果、JJ・JFL・TT のグループ間における異同が3つのパターンに分類されることが分かった。1) 3つのグループがそれぞれ違う傾向を示す場合、2) JFL と JJ とは同様だが、TT は異なる場合、3) JFL と TT とは同様だが、JJ は異なる場合である。以下の表4のように結果を示すことができる。

表4. 切り出しにおける意味公式の出現傾向の JJ・JFL・TT のグループ間における異同

意味公式の出現の有無	
3グループ間で違う傾向	
「相手の発話の受け入れ」	92.711***
「否定理由」	51.848***
「代替案」	59.993***
JFL と JJ は同様だが、TT は異なる	
「謝罪/感謝」 _J 、「願望」	7.979*
JFL と TT は同様だが、JJ は異なる	
「聞き返し」 _J 、「呼びかけ」	5.910*

* $p < .05$, *** $p < .001$

表4から(A)不同意への付加詞、(B)不同意の主要部、(C)代替的見解の各意味公式グループの代表である「相手の発話の受け入れ」、「否定理由」、「代替案」はJJ・JFL・TTの間で出現率が有意に異なっていることが分かった。

4.1.2 状況的な変数の影響

ここで、切り出しに状況的な変数がどのように関わっているかを検討するために、JJ・JFL・TTの切り出しに多く現れた(A)(B)(C)の代表的な意味公式の出現の有無と状況的な変数(上下関係、親疎関係、負担度の大きさ)との関係に焦点を当てて決定木分析を行った。3つの状況的な変数という名義尺度を独立変数として、当該の各意味公式の出現及び非出現の2つのデータからなる名義尺度の頻度を従属変数とした。表5はその結果を示すものである。

表5. 切り出しにおける意味公式の出現の有無に対する変数の影響

	意味公式	影響が最も強い変数	次に影響が強い変数
JJ	相手の発話の受け入れ	負担度***	負担度「大」に、上下関係*
	否定理由	負担度*	-
	代替案	上下関係*	-
JFL	相手の発話の受け入れ	-	-
	否定理由	負担度***	-
	代替案	-	-
TT	相手の発話の受け入れ	-	-
	否定理由	-	-
	代替案	-	-

* $p < .05$, *** $p < .001$

JJの「相手の発話の受け入れ」に最も影響を与えているのは負担度の大きさであった[$\chi^2(1) = 38.228, p < .001$]。負担度が小さい場合は35%の割合で「相手の発話の受け入れ」が現われ、負担度が大きい場合にはあまり現われなかった(6.9%)。JFLとTTにはこのような傾向が見られず、相手との上下関係、親疎関係、不同意の負担度の大きさという3つの変数のいずれにも有意な差が見られなかった。

「否定理由」に関して、JJでは最も影響を及ぼしたのは負担度の大きさであった[$\chi^2(1) = 4.394,$

$p < .05$]。負担度が小さい場合には、JJは43.8%の割合で否定理由によって不同意表明を切り出すが、負担度が大きい場合には、55.3%の割合で否定理由によって切り出す傾向が見られた。JFLではJJと同様に負担度の大きさの違いに有意な差が現われた[$\chi^2(1) = 15.531, p < .001$]。負担度の小さい場合は出現率が14.4%であったが、負担度が大きい場合には33.1%であった。TTでは「否定理由」の意味公式にはどの変数による影響も見られなかった。

「代替案」においては、JJでは上下関係の違いによる影響が見られた[$\chi^2(1) = 4.505, p < .05$]。同等の関係の人に対しては4.4%で現れたが、目上の人に対しては10.6%であった。JFLとTTにはそのような傾向がなく、どのような変数による影響も見られなかった。

4.2 不同意表明の終結部

4.2.1 全体的な傾向

終結部において、(A)不同意への付加詞、(B)不同意の主要部、(C)代替的見解の3つの意味公式グループの出現頻度を見ると、図3のように、JJには(C)代替的見解が最も多く現れたことが分かった。JFLとTTにも同じような傾向が見られたが、その割合はJJより低かった。(A)不同意への付加詞に関してはJJ・JFL・TTのどのグループにおいても出現率が低かった。不同意への付加詞は終結部として使用するにはあまり好まれていないと言える。図3の割合はJJ・JFL・TTの各意味公式グループを全体の意味公式グループの出現回数(320回:8場面×40名)で割ったものである。

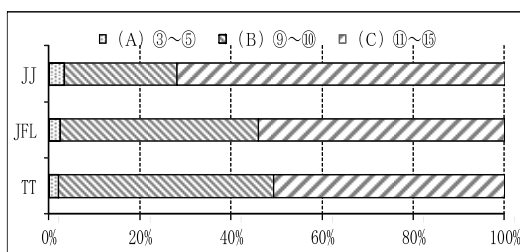


図3. 終結部の全体的な出現傾向

図3の割合を意味公式ごとに示すと図4になる。JJとTTには10種類の意味公式が観察された。それは「ためらい」「情報要求」「謝罪/感謝」「否定理由」「不同意の結論」「代替案」「願望」「条件付け妥協」「意見要求」

「代替案の理由」である。JFL には「ためらい」が現われなかった。図4にある数字は、上記の意味公式の10種類を指している。

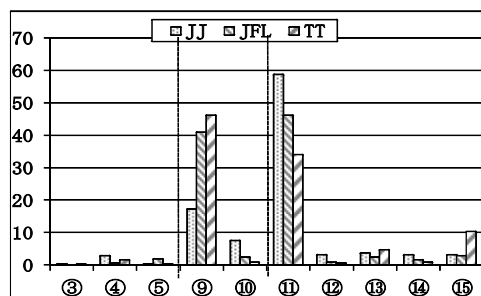


図4. 終結部の各意味公式の出現率

(A) 不同意への付加詞の意味公式グループ(意味公式、)はどの意味公式も出現率が低かった。(B) 不同意の主要部については「不同意の結論」に比べ「否定理由」が多く現れた。この点は JJ・JFL・TT に共通している。(C) 代替的見解については、JJ・JFL・TT のどのグループにおいても「代替案」が最も多く現れた。終結部において「否定理由」と「代替案」は(B) 不同意の主要部と(C) 代替的見解のそれぞれの意味公式グループの代表だと考えられる。

次に、終結部に現れた10種類の意味公式の出現傾向にどのような違いが見られるかを決定木分析によって調べた。分析手順は4.1.1の切り出しの場合と同様である。その結果、意味公式の種類の違いに有意な差が現れた。特に、表6に示すようにグループ間における異同に3つのパターンが観察された。

表6. 終結部における意味公式の出現傾向のJJ・JFL・TTのグループ間における異同

意味公式の出現の有無	
3グループ間で違う傾向	
「代替案」	39.217***
JFLとJJは同様だが、TTは異なる	
「代替案の理由」	22.457***
JFLとTTは同様だが、JJは異なる	
「否定理由」	65.568***
「不同意の結論」	10.705**
「条件付け妥協」	
「願望」「意見要求」	14.990***
「情報要求」	

*** $p < .01$, ** $p < .001$

表6から、終結部によく現れた「代替案」はJJ・JFL・TTの間で出現率が有意に異なっていることが分かった。「否定理由」については、JFLはTTに近い傾向が見られた。

4.2.2 状況的な変数の影響

ここで、終結部における(B) 不同意の主要部と(C) 代替的見解のそれぞれの代表である「否定理由」と「代替案」を取り上げ、それらに対する上下関係、親疎関係、負担度の大きさといった状況的な変数の影響を調べた。4.1.2と同様な手順で決定木分析を行った。表7はその結果を示したものである。

表7. 終結部における意味公式の出現の有無に対する変数の影響

意味公式	影響が最も強い変数	次に影響が強い変数
JJ	否定理由	親疎関係***
	代替案	親疎関係***
JFL	否定理由	親疎関係***
	代替案	親疎関係***
TT	否定理由	上下関係***
	代替案	親疎関係**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

「否定理由」に関して、JJでは親疎関係による影響が見られた [$\chi^2(1) = 16.005, p < .001$]。「親」の関係では25.6%で現れたが、「疎」の関係では8.8%で現れた。JFLにおいてもJJと同様な傾向が見られ、親疎関係の違いによって出現率が異なっていた [$\chi^2(1) = 39.097, p < .001$]。「親」の関係では「否定理由」による不同意表明の終結が58.1%見られたが、「疎」の関係では23.8%であった。しかし、TTでは「否定理由」の出現の有無に最も影響を及ぼしたのは上下関係であった [$\chi^2(1) = 14.532, p < .001$]。同等の相手については「否定理由」の出現率が35.6%であったが、目上の相手については56.9%であった。この点はJJおよびJFLと異なっている。

「代替案」に関しては、JJに最も影響を与えているのは親疎関係であった [$\chi^2(1) = 18.620, p < .001$]。「親」の関係では46.9%で現れたが、「疎」の関係では出現率がより高く、70.6%であった。JFLにも同じ傾向があり、親疎関係の強い影響が見られた [$\chi^2(1) = 61.596, p < .001$]。「親」の関

係については出現率が 24.4%であったが、「疎」の関係については 68.1%であった。TT においても同じように親疎関係の違いによる影響が観察された [$\chi^2(1) = 10.143, p < .01$]。「親」については 25.5%で現われたが、「疎」については 42.5%であった。

5. まとめと考察

ここで、本研究の分析結果をまとめて、タイ語を母語とする日本語学習者はどのような語用論的特徴を持つかを考察する。

5.1 不同意表明における言語形式

(1) 不同意表明の一連の談話パターンを考えると、JFL は (A) 不同意への付加詞のグループに属している「相手の発話の受け入れ」によって切り出す傾向にあった。これは JJ 及び TT と異なった独自の傾向であり、学習者の中間言語の独立した特徴だと考えられる。

なぜこのような特徴が見られるのだろうか。フォローアップ・インタビューによれば、JFL は状況によらずとりあえず賛成に見せかける必要があると強く意識していることが分かった。JFL は直接的な話し方によって日本人に悪い印象を与える可能性を危惧し、直接相手の意見を批判することは避けるべきだと考えたようである。この結果は学習者が社会的文化的規範の差異を意識したこと由来する語用論的特徴と言えよう。日本語のステレオタイプの表現を過度に強調した可能性がありうる。ただし、これが教育訓練からの影響によるものなのか、現段階のデータではまだ結論を出すことができないため、今後、教科書の分析などを加え、詳しく検討する必要があると思われる。

実際の JFL による返答を見ると、以下のようなものが挙げられる。

4) それはいいですが、試験が近くて、皆その準備で忙しいので、皆の協力が期待できません。ポスターだけ作った方がいいと思います。

(目上・親・大)

5) とてもいい意見です。ですけど、試験も近いし、専攻の学生は皆その準備で忙しくて、学生の協力がほとんど期待できないと思います。

(目上・親・大)

6) そんなことをしたらすばらしいでしょうね。でも他のせんこうの例を見るとデモンストレーションを

してもあまり効果がきたいできませんが...

(目上・親・小)

JFL には 4) のような切り出しがよく見られたが、例 5) と 6) のようなものも観察された。学習者の使用に文法的な間違いはなかったが、適切さには欠けているだろう。例 5) は日本語母語話者ではあまり使わない表現であり、例 6 は褒めすぎの表現である。日本語母語話者に逆に皮肉にとられて不愉快な思いをさせてしまい、思わぬ誤解を招くことが考えられる。こうしたことに関して学習者は注意すべきである。

(2) 終結部に関しては、全体的な傾向から JFL は JJ と TT の言語使用の中間に位置していることが分かる。JJ には代替的見解で「代替案」を用いて不同意表明を終結する傾向があった。各意味公式の出現傾向を見ると、「否定理由」をはじめいくつかの意味公式において JFL には TT に近い傾向が見られた。これらの結果は、学習者の言語使用が両者の間で揺れていることの証拠と見なすことができる。

5.2 状況的な要因との関係

切り出しの意味公式の選択における要因の影響を調べた結果、JFL は「否定理由」を使用する際に負担度の大きさに配慮するという点で JJ と共通していることが分かった。しかし、JFL は、「相手の発話の受け入れ」にどの要因との関係も見られなかったという点で JJ と異なり、TT と同様な傾向を示した。終結部における状況的な変数の影響に関して、「代替案」で不同意を終結する場合、JFL は JJ および TT と同様に親疎関係の影響を受けている。「否定理由」で終結する場合は、JFL は JJ と同様に上下関係より親疎関係の影響を強く受けていることが明らかになった。

ここで、状況的な要因との関係の結果に関して ルンティエラ (2004) の結果を踏まえて考察したい。本研究は不同意表明について、提案に対する断りと同様に、日本語母語話者には上下関係の強い影響が見られるのに対して、タイ語を母語とする日本語学習者にはタイ語母語話者と同様に親疎関係の強い影響が見られると予測した。しかし、不同意表明の切り出しと終結部を検討した結果、予測した現象は見られなかった。その背景にデータの扱い方が異なっていたこともあるが、提案に対する断りと本研究の不同意表明は発話行為の性質が異なっており、その

異同が分析結果に異なる影響を与えた可能性も考えられる。ルンティエラ (2004) では提案する側と提案を受ける側との間に利害関係はなく、提案する側は提案を受ける側の利益誘導のために行動するという場面を設けた。分析の際、断りへの付加詞と否定理由の他に、「やっぱりこっちにする」というような「決意表明」が多く現れたとの結果を得ている。それに対して、本研究では、これから一緒に行動する事柄について意見を出し合う場面を設定した。分析した結果、不同意表明では「決意表明」のようなものはほとんど現れず、その点が先行研究との大きな相違であろう。

不同意表明に関して、今回得られた結果を教育現場に生かし、日本語でよく使われる不同意表明の切り出しおよび終結部とそれに関わる状況的な要因との関係を踏まえて教えることによって、学習者は日本語母語話者に近い表現を適切に用い、円滑なコミュニケーションがはかれるようになると考えられる。

6. おわりに

本研究では不同意表明の切り出しと終結部に焦点を当て、統計的な手法によってタイ語を母語とする日本語学習者の語用論的特徴を探った。本研究の調査方法である DCT はあくまでも意識調査に近いものであるため、音声などの実際の発話データによって得られるようなより詳細な特徴を明確にすることができなかった。今後、実際の発話のデータとの比較を通してここで得られた結果を検証したい。また、今回検討できなかった不同意表明の全体像や意味公式における表現のバリエーションなどを他の手法を用いて検討することによって、語用論的特徴をさらに詳細に分析したい。

注

1. 発話行為 (Speech Act) とは、発話により依頼する、謝罪するなどの言語機能を果たす行為のことである。この概念は Austin (1962) と Searle (1969) によって提唱された。「窓を開けてくれませんか」という疑問文で発話行為を行った場合、「質問」をしているのではなく、「要請」という行為を行っていることになる。
2. Takahashi & Beebe (1993) はこういった発話行為を「訂正」(correction) と呼んでいる。
3. 意味公式 (semantic formulas) は意味内容や意味機能によって言語表現を構成する要素を分類する単位である。
4. Beebe et al. (1990) の suggestion に対応する。
5. 大学で日本語を専攻している学習者に限った結果、ほ

とんどが女性であったため、性別比を同程度に揃えることができなかった。

6. 日本語学習者グループの日本語能力レベルを統制するために、本研究は調査時により多くの人数を集め、小川 (1993) のプレースメントテストとしてのクローズ・テストと「Simple Performance-Oriented Test (SPOT)」を能力判定テストとして使用し、学習者の取った得点で日本語能力レベルを認定した。
7. DCT に、例えば場面 3 についてはあまり賛成していない旨と相手に提案された料理は季節にあまり合わないという理由を提示し、場面 4 についてはどうしても賛成できない旨と相手に提案された料理は生のもので歓迎会に参加する外国人が食べられないという理由を提示した。
8. 単一の意味公式のみで構成された発話は、切り出し部、終結部両方の分析対象とした。

参考文献

- 伊藤惠美子 (2004) 『マレー語母語話者のポライトネスの諸相 勧誘・依頼行為に対する返答を中心に滞日期間の観点から』名古屋大学大学院国際開発研究科博士学位論文
- 小川多恵子 (1993) 「プレースメントとしてのクローズ・テスト」『日本語教育論集』(8), 201-213.
- 木山幸子 (2005) 「日本語の雑談における不同意の様相 会話教育への示唆」『言語情報学研究報告』(6), 165-182.
- 国際交流基金 (2013) 『2012 年 海外日本語教育機関調査速報値発表 (2013 年 7 月 8 日発表)』
<http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/result/survey12.html>
(2013 年 8 月 30 日)
- 謝オン (2001) 「談話レベルからみた「依頼発話」の切り出し方 日本人大学生同士と中国人大学生同士の依頼談話から」『日本研究教育年報』(5), 77-101.
- 末田美香子 (2000) 「初対面場面における不同意表明と調整ストラテジー」『日本語教育論集』(16), 23-46.
- 田島弥生・石崎俊 (2012) 「日本語、韓国語、中国語の依頼談話における前置き表現の分析」『Studies in Language sciences, Journal of the Japanese Society for Language Sciences』(11), 145-173.
- 浜田昌子・成田高宏 (2007) 「タイ人日本語学習者の「申し出の断り」表現に見られる「マイペンライ」の影響 ポジティブ・ポライトネスの表明として」『小出記念日本語教育研究会論文集』(15), 39-52.
- ルンティエラ ワンウィモン (2004) 「タイ人日本語学習者の「提案に対する断り」表現における語用論転移」『日本語教育』(121), 46-55.
- Angouri, J. & Locher, M. A. (2012). Theorising disagreement. *Journal of Pragmatics*, 44, 1549-1553.
- Austin, J. L. (1962). *How to do Things with Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Beebe, L. M. & Takahashi, T. (1989a). Sociolinguistic variation

in face-threatening speech acts: Chantisement and Disagreement. In Miriam R. Eisenstein (Ed.), *The dynamic interlanguage: Empirical studies in second language variation*. New York: Plenum Press, 199-218.

Beebe, L. M. & Takahashi, T. (1989b). Do you have a bag?: Social status and patterned variation in second language acquisition. In Susan Gass et al. (Ed.), *Discourse and Pragmatics* (Multilingual matters, 49. Variation in Second language acquisition V.1), 103-125.

Beebe, L., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic Transfer in EFL Refusals. In R. Scarcella, E. Andersen & S. Krashen (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*. New York: Newbury House, 55-73.

Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.

Rees-Miller, J. (2000). Power, severity, and context in disagreement. *Journal of Pragmatics*, 32, 1087-1111.

Searle, J. (1969). *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sifianou, M. (2012). Disagreement, face and politeness, *Journal of Pragmatics*, 44, 1554-1564.

Takahashi, T. & Beebe, L. M. (1993). Cross-linguistics Influence in the speech act of correction. In G. Kasper & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlanguage Pragmatics*, New York: Oxford University Press, 138-158.

びなんそっていくん ぼらにー / 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科

poraneebun@yahoo.co.jp

稿末資料 (DCT の例)

あなたは学生で、今、来週末の連休と一緒に旅行する場所について親友と話しているところです。

その親友 : ねえ、連休と一緒に旅行することにしたじゃない? 私神戸に行きたいんだけど。。。。

あなたの気持ちは以下の通りです。あなたはその親友にどのように言いますか。

(場面1) あなたの気持ち:

あまり行きたくない理由: 旅費が多くなる

かもしれないことが少し気かりである。

あなた :

(場面2) あなたの気持ち:

どうしても行きたくない理由: 神戸のような

遠いところに行くのは疲れる。

あなた :

Pragmatic Features in Disagreements by Thai Learners of Japanese

PINUNSOTTIKUL Poranee

Abstract

This study examines the act of disagreement expressed by Thai learners of the Japanese language, by exploring the frequency of semantic formulas appearing in the opening and closing of disagreement act with regards to contextual variations (status of interlocutors, intimacy, ranking of imposition). Data was collected by Discourse Completion Test and analyzed by means of Decision Tree Analysis. The results showed that learners displayed a high frequency of statements of positive opinions that initiated disagreements, which is in contrast to both Japanese and Thai native groups. Statements of positive opinions in the opening of disagreements by learners were also different from Japanese in terms of the ranking of imposition effect. Japanese tended to give alternative choices in the closing of disagreements. The use rate of alternative choices by learners was between that of both groups of native speakers.

【Keywords】 act of disagreement, Thai learners of Japanese, pragmatic features, semantic formulas, significant differences

(Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University)